北羽新報　2025年（令和7年）9月8日（月曜日）

市民おもしろ塾

蔦重版浮世絵説く

能代市出身　大河で考証担当の浅野さん

蔦屋重三郎の生涯や浮世絵の魅力を語った浅野さんの講演（能代市柳町の旧料亭金勇で）

能代市出身で浮世絵研究の第一人者として知られる美術史家、浅野秀剛さん（大和文華館長）による講演「蔦屋重三郎版の浮世絵～浮世絵の神髄に迫る～」が6日、同市柳町の旧料亭金勇で開かれた。美術史の視点から「蔦重版」の魅力や浮世絵が果たした文化的意義を紹介した。

浅野さんは能代高から立命館大に進学し、学習院大で博士（哲学）取得。現在は奈良市の大和文華館長を務めるほか、大阪市のあべのハルカス美術館長、国際浮世絵学会長などを兼任。テレビや新聞でも活躍し、NHK大河ドラマ「べらぼう～蔦重栄華乃夢噺～」では浮世絵考証を担当した。

江戸時代後期に活躍した名版元（出版業者）、蔦屋重三郎（通称・蔦重、1750～97年）が世に広めて人々を魅了した「蔦重版」を取り上げた講演では、共同出版した錦絵、喜多川歌麿や東洲斎写楽との関係などについて語った。

このうち、共同出版した錦絵については、蔦重が最初に出版した錦絵「雛形若菜初模様」を取り上げ、初期の図に「永寿版」、「耕書堂」の二つの印があることから、西村屋与八という大版元との共同出版だったと紹介。西村が遊女絵を描く際、吉原で生まれ育ち、この地に精通した蔦重に目を掛け、共同出版した。新しい遊女が登場するたびに出版した西村は、遊女絵の大判出版として確立したとみなされたため、蔦重版の遊女絵は類似する刊行物「類版」とされ、差し止められた。

蔦重はその後、遊女絵をまとめた絵本「吉原傾城新美人合自筆鏡」を出版。類版とされた一枚絵、大判の形式を避けるようになったという。

また、喜多川歌麿について今日に残る代表作の6、7割が蔦重版だとし、「蔦重が現在に至るまでの評価を決定付けたことは間違いない」と述べ、「歌麿がどんな絵を描けば売れるか、能力を最大限に引き出し、ビッグネームに育てた蔦重は非凡だ」と評価した。

何枚もの絵をスライドで比較したり、ドラマ「べらぼう」のシーンと照らし合わせたりし、蔦重版や浮世絵の魅力を語った。

講演は市民おもしろ塾が主催し、約140人が参加した。